雨があがれば

やしろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雨があがれば

【Ｎコード】
Ｎ５３６８Ｏ

【作者名】
やしろ

【あらすじ】
受験生のときに、１度は思ったことはないでしょうか。

突然だけど、あなたにとっての夏休みのイメージって、どんな感じだろうか？
鳴りやまないセミ、冷えたスイカ、巨大なひまわり、そして、すべてを焦がさんばかりの日差し。そんな感じだろうか。
今挙げたのは、全部僕が去年までなんとなく抱いていた夏休みのイメージ。少しはあなたの持つイメージとかぶると思う。
そして高校受験をひかえたいわゆる「受験生」である今年の僕のイメージはというと、寒いくらいの冷房、夏期講習、模試とその返却、そして、毎日があっという間にすぎていく、うすら寒い不安。あなたは共感できただろうか。
昔はどうだか知らないけど、今の中3にとって、受験はほとんど義務みたいなもんだ。やらないわけにはいかない。
もちろんそんなの言葉のあや、単なる比喩であって、受験をしない子や、いろんな事情でできない人もいる。
でも、僕は何か夢や目標があるわけでもないし、末は博士か大臣か、なんて言われるような特別頭のいい人間でもない。でもとりあえず高校には行っとかないとまずいかな、という思いで受験生になった。

受験って、戦いだ。こんな言い方をすればあなたは笑うかもしれない。
たしかに体のどこかが傷つくわけではない。血も出ない。死んだりもしない。たいていは。
でも、たしかに戦いなんだ。自分の中の多くのものをすり減らしながら、誰かと、あるいは何かと競う。
そしてそんな生活はとても疲れる。夏休みのイメージを塗り替えてしまうほどに。

さて、長い前置きになっちゃったね。愚痴がたまってたんだ、うん。
これは僕の夏休みの、とある一日の話。
あなたには共感してもらえるだろうか？

○

「今返却した模試の成績表は、本番の大切なデータになるからな。
各自、自分の弱点を克服するためにも、しっかりと結果に向き合うように！」
塾の先生の言葉が、大教室にむなしく響く。
むなしく、っていうのは、要するに誰もまともに聞いちゃいないということだ。
みんな自分の成績へのリアクションで忙しいのだ。耳タコなセリフになんていちいちかまってられない。
そして僕も、そんな大多数の中の一人だった。
「マコト、模試、どーだった？」
同じ塾仲間が声をかけてくる。とっさに結果表を見えないように折りたたんだ。
「え、あは、全然、上がってなかった。まいっちゃうよ。おまえはどうなの？」
声が少し裏返ったような気がした。でも、向こうはそんなことには気がつかない様子で、満面の笑みをたたえて結果表をつきつけてくる。
「見てくれよ、ようやくB判定出たんだ！いやー、神様はやっぱ見てんだなー！おれ、最近すっげー頑張ったもんなぁ。あっ、これもマコトがバカなおれにもわかるように教えてくれたからだな！神様、マコト様、奇跡をありがとう！」
一人でハイテンションになっている友人に精一杯の作り笑いを向けながら、僕はさっき渡されたばかりの自分の成績表を握りつぶした。

下がり続けるグラフ、D判定だらけの現実も、一緒に潰れてくれたらどんなにいいだろうと、思った。

一緒に学習室で勉強していこうというカズキの誘いを断って、僕は塾を出る。

いつもは暗くなるまで勉強していくようにしているのだが、今日はとてもそんな気分になれなかった。

正確に言おう。

努力なんてあほらしくてやってられなくなったのだ。

だって、そうだろう？毎日毎日、それこそやりたいことも我慢して、自分をすり減らして、泣きたい思いでやってきた、これがその結果か。

成績は下がるばかり。よくて現状維持が精一杯だ。

なんで、あいつはそうじゃないんだ。僕はさっきのカズキの笑顔を思い出す。

カズキはバスケ部でぎりぎりまで現役でねばっていたクチで、成績は下の中がせいぜいだった。乞われるままに、僕は勉強を教えた。

一緒にもがいてくれる相手がいて、嬉しかった。なのに、なんで、なんであいつだけ。

ぽつ、と、アスファルトの一点が濃くなった。みるみる濃くなっていく。

雨が降ってきたんだ。

夏の通り雨は激しさを増し、いくらもたたないうちに僕はぬれ鼠になった。

とにかく雨宿りをしようと、僕は歩道橋の下に逃げ込む。

そして、彼女に会った。

○

最初、逃げ込んだ先に人がいたことに驚いた。
雨で通行人は散り、周りには誰もいないと思い込んでいたからだ。
「タオル」
「え」
「ずぶ濡れじゃん。貸すからさ、拭きなよ」
話しかけられたから2度びっくりした。
ありがとうございます、と失礼のないように言って、僕はタオルを受け取りつつ、彼女の顔を盗み見た。
見覚えがある気がする。どこかで会ったような・・・。
「ハンカチはさ」
「え」
「自分の使ってね。私のやつ、顔をぬぐえるほどきれいじゃないからさ」
脈絡のない発言にたじろぐ。彼女は心なしかにやにやしているように見える。
「あはは。あたしもさ、ここで雨の中、泣いたことあるんだよね。君と同じだ」
顔が赤くなっていくのがわかった。
彼女の言うとおり、僕は泣いていた。ずぶ濡れになったからわかりっこないだろうと思っていたのに。
僕は彼女に背を向け、取り出したハンカチで目元を乱暴に拭う。
「君さ、私と同じ予備校だよね」
僕の心中なんかおかまいなしに、彼女は話しかけてくる。でも、これで思い出した。この人は塾で見かけたんだ。
僕の通う塾は、正式には予備校で、大学受験を控えた高3生や浪人生も対象になっている。
そして、彼女はおそらく浪人生だろう。よく学習室でみかけた。一度も制服姿でいたことのない、彼女を。
毎日学習室で頑張ってるよね。顔、覚えちゃった」
あっけからんと笑う彼女に、なんだか毒気を抜かれてしまった。

だから、少し油断してしまったんだと思う。
「なんかあったんでしょ」
「え」
「我慢するのは体によくない。泣くならないちゃえ」
本当に不覚にも、僕はほろりと涙をこぼしてしまった。初めて話したような、赤の他人の一言で。
「あたしもね、ここで泣いたの。受験の合格発表の帰りにさ、雨ふってきちゃってね。ここで雨宿りしてね、それで、泣いたんだよね、一人で」
たどたどしい話し方で、彼女は語った。
「その日も、こうやって雨がふっててね。雨って、なんか不思議だよね。ざあざあふってると、なんだかこっちも泣きたくなっちゃうんだもん」
呼び水ってやつかなぁ、と彼女は笑う。さっきよりもずっと弱い笑い方だった。涙が退くと、なんで僕は雨宿りの先で泣いて、ほとんど初対面の人を相手にこんな話をしてるんだろう、とあらためて不思議に思った。
でも、もっと不思議だったのは、このおかしな状況を、なんだか居心地良く感じていることだった。
もっと話をしてみたいと思った。この人の話を聞きたいと思った。
「今は、どうなんですか」
「え」
「試験、落ちちゃったんでしょう？今は浪人生で、雨も、降ってるじゃないですか。泣きたくなったりはしないんですか」
今度は彼女が言葉に詰まる番だった。でも、意地悪な気持ちで言ったわけでは、決してない。
この人の言葉に、純粋に興味があった。僕の受験への疑問を晴らすヒントがあるような予感がしたから。
長い間が空いて、彼女はゆっくりと話始めた。自分の気持ちを整理しながら、という感じだった。

「泣きたい、って気持ちにはならないかな。あのとき、ここでいっぱい泣いたから。あのね、あたし、去年も君みたいに受験生だったんだ。でね、自分で言うのも変だけど、けっこう頑張って勉強、したんだよね。頭悪かったけど、ちゃんと目標も持ってるつもりだったし。でもね、結局、うまくいかなくてさ。すごい、悔しかった。あたし、なんのためにあんなに頑張ったんだろ、って思うと、ほんとに、悲しかった。すごく、むなしかった」

ここで言葉を切って、僕を見つめてくる。

きっと僕の顔が険しくなっていたからだろう。彼女の去年の姿は、今の僕そのものだったから。だから、とても人ごととは思えなかった。

「でもね、こうしてまた受験生やって、わかるようになってきたことって、あるんだよね。私、努力は１００％、絶対に報われるって思ってたんだ。でもさ、考えてみればそんなことないんだよね。うん、うまくいかないことの方が、実はずっと多いって。経験してみて、ようやくわかってきたんだ」

でも、と彼女は続ける。表情は、もう弱々しくはなかった。

「それでもね、何度もやってるうちに、うまくいくことはあるんだ。そのときって、すっごく嬉しい。飛び上がって喜びたくなるし、泣きたくもなる。この瞬間が忘れられないから、私、今も勉強してるんだと思うんだ」

彼女は、ほら、と外の方を指さす。雨はいつのまにかやんでいた。

「見て、あっち、虹が出てる」

彼女の言うとおり、夏の日差しを存分に受けて輝く大きな虹が、そこにはあった。

「まぁ、なんていうかな、雨がふらなきゃ虹は見れないってこと。うん、そういうことかな」

彼女は笑った。僕の顔も、きっと笑っていたことだろう。涙でにじんで、くしゃくしゃではあっただろうが。

○

さて、僕の話はこれでおしまい。
当然のことだけど、雨が降ったからといって、必ずしも虹が出るわけではない。
彼女も言ったとおり、出ないことの方がずっと多いのだ。
でも、それでいい。
これから先、僕の上には何度でも雨は降るだろう。また泣くこともあるかもしれない。
でも、あの日の、あの虹の輝きが忘れられないから、また雨がやむのを待とうと思う。
何度でも。

（後書き）

受験って、大変ですよね。共感、してもらえたでしょうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5368o/

雨があがれば

2010年10月27日04時23分発行